

指定研究「真宗學事研究」

史料紹介 『本山上檀古記録拔萃』

解題

こゝに紹介する「本山上檀古記録拔萃」は冊子『高倉旧学寮諸条規并本山記室記録』（大谷大学図書館所蔵 内宗大二四七三）の中に綴じこまれている後の「本山記室記録」の部分で、前の「高倉旧学寮諸条規」の部分は香山院龍溫講師所蔵の『高倉学寮諸制条』（内宗大二四八〇）の書写で、内容はいずれも高倉学寮にかゝる史料である。年次の記入はないが、用紙が版心に「高倉大学寮」と印した朱線方眼原稿用紙であるところから、高倉大学寮において、明治一五年から同二九年の間に何かの必要があつて作られたものであるうと漠然と推量していた。ところが其の後、明治四年以降の本山広報紙である「配紙」に「本山報告」を調べているうちに、つぎの記事を見いだし、推量がにわかに具体化した。

今般文部省編輯局ヨリ教育史編纂上参考ノ爲 本派學事沿革取調之義依頼有之 本寮ニ於テ取調ニ着手致候條 左記ノ條項ニ關スル記

真宗綜合研究所紀要 第六号

録有之向ハ至急取調 來三月五日迄ニ到着候様差出相成度 此段及依頼候也

一本寮創設ノ事蹟及未設以前ノ經歷

一講者其他學事ニ盡力セシ人物ノ行事

傳記 墓誌等アレハ之ヲ差出ヘク 其口碑ニ存スル事項ハ要

領ヲ記スヘシ

右ノ外 學事ノ沿革ニ關スル圖書記録等アラハ其書名 冊數及ヒ大意ヲ記シ 其他編史ノ資料又ハ參考ニ供スヘキモノハ蒐録アリ
タシ

明治二十二年二月十三日 大學寮

○學事沿革取調 這回文部省ニ於テ教育史編纂ニ付 参考ノ爲メ本派學事沿革取調ノ儀同省編輯局ヨリ依頼有リシニヨリ 細川嗣講ヲ取調掛長 江村秀山 廣瀬守一 松平龍舟ヲ取調掛ニ定メ 大學寮内ニ於テ同寮及ヒ諸教校沿革取調ニ着手セリ

（本山報告第四拾四号明治二十二年二月十五日）

つまりこの冊子は、文部省の依頼に應えるため急遽史料収集が進められた、その折のノートと察知された。

なお同じ方眼原稿用紙の筆写本『本山報告掛編纂 大学寮沿革記』―内題「真宗大学寮沿革略誌」(内宗大二四八二)は、この折の文部省への報告文書の控とみられる。

およそ「御学寮」の歴史は、宝暦五年(一七五五)高倉通り魚棚の御屋鋪跡に新築移転した―以後高倉学寮と呼ばれる―その時点から始まると言ってよい。それ以前の草創から約九十年間の歴史はまったく忘れ去られてしまっていて、わずかに講堂に貼られていた御壁書「講筵規則」三ヶ条が、御学寮創設は寛文年中であると暗黙のうちに語っているだけであった。(本文P95)

高倉学寮新築に際して講師華藏庵恵然は、これを機に学寮諸制度を一新して成文化し、この条規と所化の行儀・日常心得等を一括記録させ、『学寮諸制條』(宗大七七六五、他に写本多数)として上首寮に保管伝承させた。これが学寮人によって作られた学寮記録の最初であって、その後は『講師寮日記』『上首寮日記』『知事所日記』『三講者名譜』『御学寮講本録』その他の学寮記録が作られ、それらによって宝暦五年以降の学寮沿革史は大略組み立てることが可能となる。

ところで明治二二年、文部省の依頼により学寮開創以来はじめて

「学寮沿革史」を編纂することになったとき、学寮独自の記録以外にも広く史料を求め、詳細正確な記述を期したと思われる。その史料としては本山の『上檀間日記』が最も確実であるが、それは膨大な量であって、とても短期間では処理できない。そこで記事の要目だけを書き出した『日記目安』と、同じく「達書」だけを集録した『諸式』雑之部を手がけたのであろう。この二書からの元文三年(一七三八)より文政一二年(一八二九)に至る九〇年間三〇余項目の転写がノートの大部分を占めている。このほかいろいろな文献も訪ねたようで、肥前国唐津安楽寺第四世玄保とその弟美濃国久徳村廓然寺開基一保(玄昌)にかゝる学寮発祥縁起―筑紫観世音寺学寮名跡移籍―の伝承を慶応二年の『諸申物日記』から発見し、廓然寺誌をも加えてノートしているし、出所不明であるが尾州異義事件を思わせる文化七年より同一三年に至る一連の文書も収録している。

さてこれらの文書が文部省への報告書『真宗大学寮沿革略誌』にどれほど採り上げられているだろうか。まず沿革篇の最初に、

① 本寮ノ創立ハ寛文年中ニ在リト雖も其年時ヲ詳ニセズ 然ルニ當時ノ制度ハ漫ニ学舎ヲ建ルヲ許サレズ 而シテ一派ニ於テハ僧肥前ノ必要ヲ感ゼシヲ以テ末徒筑前国安楽寺一保等ノ議ヲ納レ筑前国観世音寺ノ学寮ノ名ヲ移シ本寺別邸涉成園ノ一部ヲ以テ之ニ充

テタリ（本文P93）とし、以下

- ② 正徳五年講師職ヲ置キ恵空ヲ以テ之ニ任ス（P91）
- ③ 宝暦四年講師恵然ノ議ヲ納レ本賛ノ規模ヲ広メ之ヲ六條高倉ニ移シ之ヲ改造ス（P97）

- ④ 七年擬講職ヲ置ク ○此歳ヨリ二月及八月講筵ヲ増開シ春講及秋講ト称シ例トス（P101）

- ⑤ 八年書庫ヲ建ツ（P89）

などがあり、「諸規則摘要篇」では、⑥講筵規則（P95）⑦春秋二講及び擬講職新設（P95）⑧学寮定（P100）など若干の引用が見られる。もともと④以下は『学寮諸制條』と重複してこのノートだけからの引用とは言い切れない。折角の苦心にもかゝらず、この『略誌』では恐らく時間的な制約の故であろう―資料の大部分は活用されず草創当初の沿革史はほとんど未熟のままで終わってしまった。その完成は後継者に委ねられることとなった。

しかし安楽寺・廓然寺兄弟寺の「観世音寺学寮名跡移籍」の伝承を学寮創設縁起に据えたことは、極めて重大であった。恐らく細川千巖以下取調掛の手にした学寮草創資料は次の三編であったと思われる。

- 1 『講筵規則』―創立は寛文年間
- 2 『安楽寺・廓然寺寺伝』―玄保・一保兄弟の献言を納れ筑紫

観世音寺学寮の名跡を移して学寮を創設

- 3 『御境内町絵図』（元文五年（一七四〇）製作 谷大図書館蔵）―涉成園西隅の一廓に「学寮」の書きこみがある。

掛員はこの三者を一挙に合体し、寛文年中、涉成園の一部に観世音寺学寮の名跡を移し学寮を創設した―当時の制度は漫りに学舎を建てることを許さなかったのだとの理由をつけ―と学寮創設由緒記を作り上げ、文部省への報告の前文に西国第一の古刹観世音寺の名を以て光彩を添えたであろう。

この『沿革略誌』は高倉大学寮の名のもとに編集された権威ある最初の学寮史である。以後つぎつぎと学寮史や論文が発表されるが、^{註1}観世音寺学寮名跡移籍説はそのまま、継承されて行く。もともと、寛文年間には東坊の堂宇が使われていたこと（東光寺寺伝）、^{註2}独立の講堂は泉州南溟寺樹心・大坂商人高木宗賢等の尽力により延宝六年（一六七八）に新築されたこと（能登往還寺由緒書、同恵琳講師文書）などが発見され、寛文年間涉成園講堂新築創建説は修正されるが、観世音寺移籍説は根強く尾を引いて今日に至っている。当学研究ではこれらの寺伝・伝承を裏付けるに足る他の文献や資料を探し求めているが、いまだ確証を得るに至っていない。

要はこのノートの価値は学寮最初の「沿革史」編集の素材の集積という点にある。特に十分にその目的を果たし得なかったにせよ、

学寮の歴史の空白を埋めることへの努力は高く評価されるべきであろう。この姿勢に導かれた後続研究者も古史料発掘に苦心し今日まで数々の業績をあげていられる。しかしそれにもかゝらず学寮草創当初の歴史はいまだに大部分が空白のままであると言ってよいように思われる。更にこの史料に詳細な検討を加え学寮史研究の上に新たな視野が展開されることを期待したい。

註

- 1 例えば 明治28『本山寺誌』教育制度篇 明治34『真宗高倉大学寮沿革略』 明治44『本願寺誌要』 大正13橋川正『真宗史要』 大正13『大谷派本覺沿革略』 昭和5岡崎正謙『草創期に於ける大谷派宗学の考察』 昭和16『大谷派学事史』 昭和19武田統一『真宗教学史』等。

- 2 昭和六〇年三月、当学事研究から木場・草野・三本三所員が直接実地検証調査に赴き、観世音寺では講堂・学問所或いは学校院が実在したこと、安楽寺では玄保・一保兄弟が実在の人物であったことは確認したが、それらと高倉学寮とのか、わりを示す史料・伝承・手がかりは何一つとして得ることができなかったと報告されている。(真宗総合研究所「研究所報」16号)

凡例

- 一、『本山上檀古記録抜萃』は、大谷大学図書館に所蔵される。
 - 一、字体・仮名使は原文の用法に従った。
 - 一、読解の便として適宜読点をほどこした。
 - 一、誤写による塗抹は省略した。
 - 一、() による註は原本筆者による。
 - 一、校訂者による註は「」によって示した。
 - 一、文中の人物で特定できるものには註をほどこした。
 - 一、記載形体を整えるため、記事の二行前に年紀を、一行目に月日を記した。
 - 一、年代の錯綜している箇所もあるが、記事の配列は原本どおりとした。
- 資料翻刻・解説は深田虎雄、資料校訂は三本昌之両所員が担当した。

本山上檀古記録拔萃

本山記室現存日記之分

上檀間日記
現在表

享保 2、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、

16、
十七、
十八、
十九、
二十、
廿一

元文
二
三
四
五
六

寛保二三四

延享
二
三
四
五

寬延
二
三
四

寶曆二三四五六七八九十十二十三十四

明和 2 三 四 五 六 七 八 九

安永
二
三
四
五
六
7
八
九
十

天明
2
3
4
5
6
7
8
九

真宗総合研究所紀要 第六号

寛政
2、
3、
4、
5、
6、
7、
8、
九詰所
10、
11、
12、
13、

享和
2
○ 3

文化
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五

文政 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三

天保二三四五六七八九十十一十二十三十四十五

弘化
二
三
四
五

嘉永
二
三
四
五
六
七

安政
二
三
四
五
六
七

万延
二

文久二三四

元治
二

慶応 二 三 四

明治二三四

諸式雜

一〇〇
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三

十四。 十五。 十六。 十七。 十八。 十九。 二十。 廿一。 廿二。 廿三。

廿四
廿五
廿六
廿七
廿八
廿九
卅
卅一
卅二
卅三
卅四
卅五
卅六
卅七
卅八

卅九
四十

諸式七

○元文三年

別啓

一、餘間御一家衆以上往生・隱居ニ付住職交代之節、早速以飛札御断可有之事

一、往生礼讃今度御考正被 仰出ひ間、各於自院平生勤行ニ相交可有拜讀事

一、文類偈、向後於自院拜讀堅ク御停止之事、右之通被 仰出

午 間、可被得其意ひ、以上

五月

右ハ別啓大門御供養廻状之節、国々へ指下之

〔白紙一頁〕

十七

〔安永三〕
嘉永二年

十一月廿九日

一、学寮江左之書付、〔慧琳〕 仏乗坊江相渡ス

学寮経蔵闕本補加へ修覆致出来ひハ、御末寺之面々ハ勿論、他山他派之輩ニ而も拝見之望有之ひ者へハ、於講堂拝見致さ

せ可申候、尤門外者勿論、所化之自寮江〔貸〕借シ渡ひ儀者可為無用ひ

右之通被 仰出ひ也

午 十一月

安永六酉年

覚

洛陽

西福寺江

惠空〔儀〕義今般以思召即内陳贈官被 仰付ひ、院号被成 御免ひ

間相願可申ひ、尤寺格之義ニハ一切不相拘ひ事

右之通被 仰出ひ也

西 正月

覚

西福寺惠空〔儀〕義、今般以 思召即内陳贈官被 仰付、院号被成

御免ひ、尤寺格之義ニ者一切不相拘ひ事

西 正月

右之書付、〔慧琳〕 佛乗坊呼出し御申渡之事

安永六酉

三月

一、御宗名之儀ニ付、當二月牧野越中守殿〔貢長〕被 仰出〔儀〕儀ニ付、左之ヶ所へ御書付を以被仰出〔貢長〕趣左之通

御宗名一件、二月初旬於江戸表牧野越中守殿より被 仰渡〔貢長〕趣二而者、急ニ御沙汰も有之間敷由ニ〔儀〕、就夫此度二条表〔儀〕之御書付之義ハ不遠内御返答可被 仰入御事ニ思召〔儀〕、然ル處御末寺彼は騒々敷様子相聞〔儀〕、此義對公邊へ御障之事ニ得者、甚不可然〔儀〕、現ニ於西方ハ右躰之振合曾而相聞へ不申〔儀〕、御當方御末寺騒々敷趣相聞〔儀〕事不被為安尊慮〔儀〕間、騒々敷儀無之様相心得可申〔儀〕、且亦先達而も申達〔儀〕通、講堂二而集会堅可為停止事ニ〔儀〕、右之通被仰出〔儀〕也

三月

日記目安拔萃

享保四年

九月十日

一、惠空義長〔儀〕浜御坊講釈相仕、逗留二出ル

享保十九年

四月廿九日

一、学寮頃日異論之有之難相治、番頭兩人并越中元龍右三人出寮可申渡旨申渡〔儀〕事

宝曆八年

五月八日

一、学寮内講伺之事
一、学寮書物藏寄附人有之、願之事

廿一日

一、学寮経蔵江御経御納願之事
一、学寮経蔵、絵圖を以伺之事

十月朔日

一、華蔵庵〔惠然〕於黒書院講釈満講ニ付、拝領物被仰付事

宝曆九年

五月朔日

七日

一、学寮開講御成之事

十六日

一、学寮開講之事

八月廿一日

一、学寮経蔵出来二付、詰所を見分之事

廿二日

一、〔從如・乘如〕両門様学寮江御成之事

一、学寮経蔵大阪平野屋へ寄附二付、披露状之事〔返〕

明和七年

六月廿二日

一、学寮廿四日満講伺之事

廿六日

一、〔同繼〕嗣講法受寺死亡、庵号御染筆願之事

安永元年

四月九日

一、学寮両部開講之伺

御成御礼、着帳之事

五月七日

一、学寮内講伺之事

六月五日

一、学寮内講講了伺之事

十九日

一、学寮秋講開講之伺之事

一、学寮両部満講之御届之事

廿一日

一、〔義龍〕秋講開講専称寺、御成無之

八月二日

一、秋講満講二付届之事

安永二年

六月十日

一、来午夏講講本伺之事

一、右二付講師・嗣講別段呼出、以書付申渡

七月

一、学寮満講之伺

但 〔乗如〕 本門様計御成被 仰出

八月朔日

一、上首・知事ヨリ開講伺之事

安永三年

六月八日

一、當秋講専称寺江被 〔義龍〕 仰付

但、上首・知事ヨリ願出之事

八日

一、擬講専称寺呼出、以書付講本申渡 〔義龍〕

一、来夏講講本被 仰付

真宗総合研究所紀要 第六号

廿九日

一、学寮満講二付、〔乗如・応如〕 両門様御成

十一月廿八日

一、学寮経蔵欠本補修復出来之上ハ、御末寺并他山他派之輩拝見届
けハ、拝見為仕け而も不苦哉、〔慧琳〕 佛乗坊江相尋け処、了簡之趣書付
を以申上け事

一、右二付佛乗坊江相渡堅紙書付之事 〔慧琳〕

正徳五乙未年ヨリ享保十八年迄日記目安

九月廿一日

一、洛陽西福寺隠居恵空青威儀御免、式人扶持被下、学寮講尺被
仰付け 〔釈〕

正徳六年日記無之、〔六月廿二日〕 七月六日ニ享保ト改元ス、享保二年日記

無之、三年同断

〔享保〕十二年

四月十二日

一、洛陽西蓮寺於学寮講釈被仰付 〔恵曉〕

四月廿五日

一、於御寺内学寮、洛陽西蓮寺惠曉往生之事

諸式八

○元文四年乙未六月五日、勸修寺ヨリ下間ノ畧系図依尋被 認遣
候、写左ノ如シ

経基王廿代頼英男
号下間

・法眼頼亮 叙法眼（年月不知）
慶長六年九月死去（年齢不知）

法印頼良 寛永十四年二月三日叙法印四十七
歳、正保四年十二月死去五十七歳

法眼頼祐 延宝七年二月十日叙法眼四十三
歳、天和三年二月死去四十七歳

無位頼紹 実頼祐兄宗叔男
元禄四年七月廿八日死去十九才

法橋頼房 実頼祐弟○元禄四年十二月十二日叙法橋五十三才
同十五年二月十九日死去六十三才

法眼頼尚 実浅井佐兵衛宣政男○元文二年十二月廿二
日叙法眼五十七才

経基王廿代真頼男
・法印頼龍 叙法印年月不知。慶長十四年六月十五日死去
号下間 年令不知。中絶
・法橋頼律 実建部内匠頭政字外孫
。寛永三年十二月相統
。正徳三年閏五月十六日叙法橋十六才
。享保十九年正月十三日死去三十七才

無位頼愛

○三月十九日

観修寺殿へ新門様大僧正御願に、折帟下間治部卿頼尚持参、左ノ
如シ

大鷹檀昏

	申大僧正		勘例
		元禄十四年六月十六日	二十歳 任大僧正
僧正光乗	（安廻）		光性 （真廻）

		元文二年七月十五日	十七歳 任僧正	〔玄如〕 光乗
--	--	-----------	------------	------------

○寛保二壬戌年、左ノ両名非法ヲ申觸レ諸門徒ヲ迷スニ、吟味ヲ遂

ケ一宗ノ正義ニ改メシム

中長者町西洞院西へ入町法光寺旦那

西洞院竹屋町上ル處 茗荷屋宗誓

間ノ町五條橋通下ル町養蓮寺旦那

御幸町三條下ル所 大坂屋伊佐工門

諸式九

○寛保四甲子年

〔二月十四日〕

真宗総合研究所紀要 第六号

口上覚

大坂上本町八丁目

塩津九郎兵衛

右ハ大佛塗師屋町指物屋重兵衛借座敷罷在候

大坂おはらひ筋つりかね町

酒井 治兵衛

〔知〕智恩院町ははや橋東へ入

鼠屋 宇兵衛

白川橋

八木 志 摩

右四人當本山学寮之儀彼は虚言ヲ申觸、末寺門徒共ヨリ金

銀取集候由相聞候、從當御門跡許容無之筋申觸候テハ差支

〔儀〕ノ義共御座候間、被遂御吟味向後急度相止候様被仰付被進

ハ様頼被致候、以上

本願寺使者

二月十四日

打田万右衛門

慶応二寅年 諸申物日記 拔萃

〔安樂寺〕尚又拙寺四世玄保義 〔儀〕御本廟ニ相詰、〔塚如〕淳寧院様・〔常如〕泥洹院様而御代常

随御奉公申上候事ニ御座候、則御召之御状安樂寺及檀頭之者迄被下

置候、其御状数通御座ハ、将又玄保義一保与申者、〔第〕淳寧院様御代於

御寺内日蓮之徒難問之時、其頃一保事東山南禅寺へ為勤学在京いた

し罷在ハ處、南禅寺ハ駈付日蓮徒ヲ降伏仕候、其 御感之餘り御殿

ニ被為召、御懇之御意被成下、廓然大悟之者ト御感賞被遊ハ、其時

之御意ニ肥前之国ト申テハ遠国之事故、ケ様成時節甚心元なくハ得

ハ、近国ニ有之度旨被仰^レ、仍之濃州ニ一字建立いたし、則 淳寧
院様御感賞之御意ヲ以大悟山廓念寺ト被成下 御免、開基ト相成^レ
事ニ御座^レ、且高倉講堂之義^{〔儀〕}、筑後国太宰府觀世音寺ニ在之候講^{〔マコ〕}
テ御座^レ處、日蓮之徒難問之後、一山ニ学寮無之^レテ者無心元之段
被遊 御意候ニ付、玄保兄弟ニテ御吹挙申上候テ、御當山ニ御引ニ
相成^レ様御取持申上候ニ付、被遊 御起立^レ事ニ御座^レ、第六世智
山、第四世玄保義者^{〔儀〕}別件申上^レ通、依御召新發意德保ニ寺務ヲ譲^レ
御本廟江相詰、常隨御奉公申上^レ處云々

○明治十二年更正寺院明細帳 抜萃

岐阜縣美濃國不破郡久徳村一番地

真宗東派 大悟山 廓然寺

開基 玄昌 肥前国松浦郡唐津安樂寺玄保弟
創立 永昌^{〔正〕}十癸酉七月二日

開基玄昌者万治二年琢如法主ノ時、南禪寺ヨリ本宗工對シ法門
諍論ノ端ヲ開キシニ、右玄昌問答往復シ遂ニ勝利ヲ得タリ、其
褒賞トシテ法主ヨリ七條・五條・念珠等ヲ授與シ廓然寺ト命セ
ラル、後帰依ニヨリテ當地ニ一字ヲ創立ス

○記室記録 抄

美濃國不破郡久徳村

大悟山 廓然寺

明曆二丙申年二月、肥前国松浦郡唐津安樂寺第三世^{〔四〕}不遠法弟玄昌^{〔玄保〕}
創建

○明細帳 寺蹟部 抄

廓然寺

堂 班 脇間昇階 万治三子年四月十九日許可
本 尊 御裡 常如法主 願主 玄昌

延宝五年二月十五日

祖師真影 御裡 一如法主 願主 玄昌

天和三癸亥年仲春廿四日

太子高僧繪像 御裡 一如法主 願主 玄昌

元禄七年六月廿七日

蓮如法主繪像 御裡 常如法主 願主 玄昌

延宝七己未年九月下浣

〔白紙一頁〕

○宝曆五乙亥年

一、学寮今般御建立

講筵規則

一、位階ノ高下官職ノ勝劣ヲ論セス、着帳次第列席可有之事

一、着座退出ノ時威儀亂動有之間敷事

一、講筵ニオヒテ戲笑雜話停止事

右寛文年中被仰出ハ制條堅可相守者也

宝曆五年乙亥四月 連 名

○同年

一、大津法中・粟津法中・伏見法中・山科坊主中、右四ヶ所へ一通

ツ、書付左之通

一、此節惣而浄土真宗之内秘事法門相語候輩有之旨ニ付、御吟

味之处、洛陽法中門徒ニオイテハ彼是其党相聞へ候、然ハ銘々

於門徒中モ正否儀イフカシキ義候間、人別ヲモ相糺候儀ニ可有

之段被仰出候事

九月

右ノ上十一月改悔ス

○学寮定

真宗総合研究所紀要 第六号

一、御壁書御定之通着帳ノ前後等

(諸制條ノ如シ、故ニ略ス)

○宝曆七丁丑年

一、学寮所化中へ被仰渡ハ趣、監寮へ被達候書付左ノ通

覚

一、於学寮本講ノ外春秋二時講談ノ儀、春ハ二・三両月、秋ハ

八・九両月相務リ候事

一、右講談相務候仁体擬講ト称可申候、尤其時々講者ヨリ遂言

上、上檀之間へ召連罷出之事

一、講談ノ節擬講ノ座講堂中ノ間敷居ノ外、西ノ柱ノ方ニ着可

有之候事

一、是迄内講相務候節ハ、机ニテ平僧ノ衣鉢着用有之候へトモ、

擬講ニ被仰付候上ハ側案ニテ講談、且飛檐御免ノ輩ハ威儀袈

裟着用可有之事

一、春秋講者在京無之時ハ、於学寮擬講ヲ次講同様ニ可相心得

候事

丑
五月

天保十四年

諸御坊并諸役寺 御用有之上京ニ付、兼而御印鑑相渡し在之分別
帑之通ニ由支、其外御召ニ付上京之節ハ者、御印鑑御差下ニ相成
候事

学寮講堂棟札如左

宝曆五乙亥年正月十五日

普請奉行

講中肝煎

富井采女清房

大坂大黒屋道誓

栗津左京清廉

同京尾張屋勘兵衛

棟梁

宮川市右衛門信泰

肝煎

中谷忠兵衛宗春

宮川長兵衛宗祐

寛延改元
宝曆元年

六月七日

一、来申年於学寮大経・正信偈・正像末講談の旨被仰出、即寮支配
正因寺江申渡ス

六月九日

一、高倉御屋敷土蔵損ハニ付取構申付ハ處、打田大炊土蔵相備可仕
依願被仰付ハ

宝曆二年

四月十六日

一、所化寮開講ニ付、巳ノ剋御成

大 経

〔安憑〕
了福寺

正信正像末

〔惠然〕
華藏庵

四月廿六日

一、略述法相義

内 講

越後恵海江被仰付可被下ハ旨、御長屋番頭ハ相願ハニ付及言上ハ
處、御免之旨被仰出

六月三日

一、御長屋惣所化中指出書付

口上書を以申上候

一、當夏中講談之義被為仰付聽聞仕難有奉存ハ
〔儀〕

一、来年酉夏中、華藏菴講師江安樂集・起信論義記両部之内奉
〔惠然〕

願上ハ

一、了福寺講師へ大經下卷統講奉願上〔安環〕

右之通御免被成下〔儀〕様宜御取次奉願〔德〕、以上

六月 御長屋

惣所化中

御役人衆中

六月十日

一、華藏庵儀、廿餘年來寮講釈無滞相勤〔惠然〕ハ二付、今般以思召呪

字袈裟頂戴被仰付、尤緞子茶紐也、且講席ニテ着用之儀者重〔恒〕

而相願ハ、御免之様子也

〔宝曆〕三年

四月十五日

一、所化寮開講、辰ノ半剋御成

五月廿九日

一、華藏庵満講之旨申上ル〔惠然〕

六月二日

一、慧琳開講明三日之旨、寮預り德應寺届ニ罷出ル

真宗総合研究所紀要 第六号

六月三日

一、学寮開講ニ付辰ノ剋御成

〔宝曆〕四年

四月十五日

一、往生要集

一、起信論義記

〔惠然〕華藏庵
〔慧琳〕惠琳

○〔五月一日〕

以口上書申上〔儀〕

御長屋講堂并所化寮漸々及破損申ハ、當夏講釈相済申ハ

ハ、来夏迄之内御修復之義奉願ハ、以上〔儀〕

戊 五月朔日

〔惠然〕華藏庵

〔慧琳〕惠琳

德應寺

東坊

御家老中様

右願之通御免思召入有之ハ間、追而致方可申上旨、於上檀之間申渡ス

六月五日

乍恐御願申上候

一、論註

一、三帖和讃

右両部来亥年夏中釈

十月二日

一、来六日夕学寮地築人数百人ツ、出申_ハ様京坊中へ申渡ス義、
定衆へ申付

十月五日

一、学寮地築二付、御地内法中_ハ老_ハ人ツ、人足出申_ハ様、願成
坊へ申渡ス

〔宝曆〕五年

正月十四日

一、学寮講堂十五日棟上之義、_{〔儀〕}從普請方御届被申上_ハ、言上_ハ
処御別条無之
右之趣、普請方粟津左京并講中大坂大黒屋道誓呼出申渡ス

四月十九日

一、御普請方富井采女・粟津左京呼出、今般学寮御普請二付始
終精勤之段神妙之至_ハ、依之拝領物被仰付候旨、於上檀之間
月番申渡

一、大黒屋道誓・尾張屋勘兵衛学寮御普請肝煎二付、於松之間
御料理被下置、御納戸方何茂罷出挨拶_ハ

〔マ〕
五年

口上之覺

一、内講入出二門偈大意 講者雪寮司了 観

右昨廿六日講了仕_ハ二付、御届申上_ハ

一、内講十住毘婆沙論易行品 講者梅寮司恵 皓_{〔清法庵〕}

右来ル六月五日夕開講仕度、奉願上_ハ

〔五月廿七日〕

一、当秋七月下旬夕九月中旬迄之間、於学寮圓覺經集註講
釈次講へ相願申度、右之趣宜被仰上可被下奉願_ハ、以上

五月廿七日

上首 法 因
寮司知事 恵 皓_{〔清法庵〕}

監寮御衆中

右御聞届之段監寮へ申渡ス

但恵琳者^(慧)当所へ招呼、右被仰付旨申渡ス

以口上書御歎申上^(儀)事

一、今般講堂御再興ニ付、院家・一家座席之義^(儀)前々之通被仰付被下^(儀)様、以各様御伺申上^(儀)処、以差圖被仰渡^(儀)ハニ付、存寄茂御座^(儀)ハ得共、上意之趣大切奉存^(儀)ハニ付奉畏、御差圖之席へ開講之節何茂先出席仕居^(儀)ハ、然処今日者差扣^(儀)様与御内意御座^(儀)ハ趣被仰聞^(儀)ハニ付、何も退座仕^(儀)ハ、外ニ出席之義^(儀)ニ付彼是騷敷義も御座^(儀)ハ様承^(儀)リハ故、仲間申合暫出席之義^(儀)差扣可罷在^(儀)ハ旨、上檀之間へ申上置^(儀)ハ、乍然只今ニ仲間之座席も無之様相聞千萬迷惑奉存^(儀)ハ、何卒以御憐愍、御簾之前開講之節各様并輪番衆出席被成^(儀)ハ所へ、當夏中座席御定被成下^(儀)様奉願上^(儀)ハ、右之趣宣御取成可被下^(儀)ハ、偏奉願^(儀)ハ、以上

宝曆五年 亥五月

在京 院家中

御一家中

定衆御中

右及言上^(儀)ハ處、御成之間御次拝借被仰付^(儀)ハ間、在京之中人数三人限右之席へ可被出^(儀)ハ、尤青袈裟着用可有之旨、定衆呼出申渡ス

〔六月十一日〕

一、内講法宗源

花寮司

随^(開敷院) 恵

右昨日講了仕^(儀)ハニ付、御届申上^(儀)候

一、内講唯識三十頌略解

月寮司

圓^(寮華庵) 繼

右十三日今開講仕度^(儀)ハニ付、御伺申上^(儀)ハ、已上

六月十一日

監寮御衆中

右及言上候処御免、監寮呼出申渡ス

六月二十日

一、学寮へ御成之節院家・定衆出席有之^(儀)様、前日自上檀之間可申達^(儀)ハ間、各左様ニ御心得可有旨、妙安寺へ相達ス

〔六月廿二日〕

一、内講 十住毘婆沙論易行品

梅寮司

恵^(謝法庵) 皓

右昨廿一日講了仕^(儀)ハニ付、御届申上^(儀)ハ

上首 法 因

六月廿二日

知事〔開轍院〕
随 患

監寮御衆中

来子年夏講

一、選擇集

〔患然〕
講師

一、四教儀集註

〔慧琳〕
次講

右奉願度、此旨宜被仰上可被下_レ、以上

六月廿二日

上首 法 因

知事 随 患〔開轍院〕

惣所化中

監寮御衆中

六月廿四日

右御免

右相伺_レ處願之通被 仰出、則講師・次講召出申渡ス

七月廿一日

一、廿五日已上剋、先達而伺有之_レ書物患琳〔患〕開講

一、学寮御長屋修復之義〔儀〕、此節_レ取懸り申度旨、右承り尾張屋勘兵

衛_レ言上、聞届申渡ス

一、学寮不時御成辰ノ剋前、右之趣定衆江申達ス

一、学寮満講届有之

〔六月廿七日〕

学寮定

一、御壁書御定之通、着帳之前後次第席次相定_レ、看板之座列

堅相守私別席相立申間敷事

一、御末寺之僧侶者縁聞停止之事

一、此度学寮御再建二付、上首并寮司之義御伺申上相定_レ、向

後寮司之儀者惣所化之内、旧住・新来之年序二拘ハラス、其

時之講者・旧寮司示談之上相究可申渡事〔儀〕

附、雖為新入寮司相務_レ時者、転席之義講者・上首指圖任

可申事

一、其年之寮司相定_レ上、旧寮司非役ニテ出席_レ時者、當役之

寮司之次江可罷出_レ、縦雖為上座、一同ニ當役之上首・寮司

_レ諸事支配不可違犯事

一、寮司者十夏、惣所化者三夏闕怠之時者、隸名相除キ可申事

附、隸名相省キ_レ後再入之時、惣所化ハ新入之首座ニ相

定可申_レ、旧寮司之再入者、席次可任上首之指圖ニ事

一、先年番頭相勤い身分者寮司相准シ、十年不参之輩隸名相除可申事

附、右番頭并非役之寮司在寮之節者、直日役相省キ可申事
一、先年上座役相務い輩、其年〆五ヶ年闕怠之時者隸名相除キ可申い、再入之節者可為惣所化同前事

一、寮内罷有い所化者、不論新・旧講堂中ノ間江可令着座い事
附、當役之上寮司者敷居際之前側江着座いたし可申い、古番頭寮外〆出席之時者任知事之指圖、監察之席之うしろ江着座可申事

一、在寮之輩者勿論、町宿之所化、京都・伏見出席之輩共、何寮之部下ト帳面ニ相立、諸事寮司〆可為支配事

宝曆五年乙亥四月 日

六月廿七日

右満座之事節、於講堂惣所化江演説ニテ披露有之、已後たんすニ納有之

宝曆七年

五月

一、於学寮春秋二時講談之儀、春者二・三両月、秋ハ八・九両月相

真宗総合研究所紀要 第六号

勤可申事

一、右相務申い身分擬講ト称シ申度い、尤モ其時之講者共〆申上召連被出、直々被仰付い様仕度事

一、講談之席、講堂中之間敷居之外、西之柱の方へ着座仕い様仕度い

一、唯今込内講相勤い節ハ、机ニ而平僧之衣鉢着用仕勤来い得共、擬講ニ被仰付節者側案ニ而講談仕、飛檐御免之輩威儀着用仕い様ニ仕度い事

一、春秋講者共在京不仕候節、於学寮擬講次講同様ニ仕度事

大坂 正行寺 〔湯法庵〕 慧 皓

勢州 法受寺 〔霧華庵〕 圓 繼

播州 福乗寺 〔開轍院〕 随 恵

勢州 〔仙宗寺〕 恵 嶺

右之者共三年已来寮司仕、内講も相務申いニ付御伺申上い、右之外擬講相勤可申者御座いハ、追々御伺可申上い

一、講釈仕い経・論・釈之類ひ、重而書付指上可申い、以上

右者講堂御建立周備ニ付、夏之外表立之講談相統い様思召いニ付、〔惠然〕華藏庵内存御尋い処書付差上い、尤此通可然旨被仰出い事

一、講堂夏本講之外春秋二時、表立講釋相統之儀被仰出、所化へ申渡之義〔儀〕監察へ申達ス、書付諸式ニ様有之

明和二年

一月廿五日

- 一、南冥寺^{〔樹心〕}智藏院威儀僧御免之處云云之事

六月廿五日

- 一、来^{〔戌〕}戊夏講伺之事

同月廿六日

- 一、学寮満講、旦^{〔恒〕}御成等伺之事

同月晦日（三十日）

- 一、学寮満講ニ付御成之事

明和四年

（七月廿八日）

- 一、学寮秋講着帳之儀町支配江申達ル事

八月三日

- 一、秋講於集會所開講之事

同月五日

- 一、学寮内講開講伺之事

九月六日

- 一、集會所ニ有之秋講満講之事

明和五年

六月廿五日

- 一、学寮満講御届、御成伺之事

七月七日

- 一、秋講伺之事

〃 十一日

- 一、當秋講伺之事

七月八日

- 一、佛乘坊^{〔慧琳〕}秋講被仰付

九月八日

一、御堂衆二も擬講相勤可申人柄有之ハ、可被仰付ハ間、寄々相調申上ハ様一老へ申渡ス

〔六月十三日〕

一、大無量寿經 〔惠然〕講師
一、浄土論註顯深義記 〔慧琳〕嗣講

来寅之夏講奉願上度、此旨宜被仰上可被下ハ、已上

六月十三日

上首
寮司
惣所
化

監寮御衆中

六月十五日

右伺之通被 仰出、則右兩人江申渡ス、監寮江ハ時日御免之段申聞ハ

六月十六日

一、〔乘如〕新門様学寮へ御成

当秋擬講

阿弥陀經 播州正行寺
讚阿弥陀經 〔海法庵〕慧皓

真宗総合研究所紀要 第六号

右両部開講

来寅年春擬講 勢州法受寺
〔蔡華庵〕圓繼

観浄土群擬論

開講

右兩人去々年今内講仕、於学寮臘も高ク寮司も勤申ハ二付、當秋、来春之擬講御願申上ハ

右慧皓計呼出以書付申渡ス、〔慧〕惠琳同伴

日記拔萃 〔三〕
同年六月廿日明和ト改元
(宝曆十四年一月より)

寶曆十四年

一月十六日

一、〔惠然〕華藏菴病氣二付帰国願之事

同月十八日

一、〔惠然〕華藏菴病死御届之事

閏十二月九日

一、古学寮二罷在候現十義病氣二付、支配今申出事 〔儀〕

一、秋講ニ付着帳之義町支配江申達事^(儀)

〃 九日

一、秋講開講之由伺之事

十月十五日

一、満講ニ付所化中御礼有之

明和六年己丑

六月五日

一、秋講伺之事

〃 〃

一、来寅年夏講伺之事

〃 廿二日

一、當夏廿四日満講届之事

明和七年三月十九日^(マヌ)

三月十九日

一、講師佛乗坊ヨリ講者之義ニ付伺之事^(義琳)

四月十二日

一、夏講開講伺之事

〃 〃

一、毎日学寮江御成之旨夫々申渡事

〃 十三日

一、来ル廿一日開講伺之事

〃 〃

一、専称寺擬講被仰付^(義龍)ニ付、寮奉行^(義龍)願之事

六月四日

一、来ル八日開講伺之事

閏六月七日

一、来夏講・當秋講伺之事

〳 廿二日

一、学寮廿四日満講伺之事

〳 廿六日

一、嗣講法受寺死亡、諡号御染筆願之事
〔圓繼〕

九月三日

一、来五日満講伺之事

〳 八日

一、嗣講福乗寺被下物之事
〔隨慧〕

十一月廿四日

一、福乗寺御退役、御文御免之事
〔隨慧〕

明和八年

六月廿二日

一、當秋講、以思召樹法庵被仰付事
〔慧皓〕

〳 〳

真宗総合研究所紀要 第六号

一、當夏講、旦廿六日満講伺之事
〔恒〕

同九年

四月九日

一、学寮両部開講之伺

御成・御礼・着帳之事

五月七日

一、学寮内講伺之事

六月五日

一、学寮内講講了伺之事

〳 十一日

一、来巳年講本被 仰付

〳 十七日

一、学寮内講了了之伺

〳 十九日

一、学寮秋講開講之伺

〃 〃

一、学寮両部満講之御届之事

七月九日

一、佛乘坊^{〔慧琳〕}帰郷之御暇願

〃 廿一日

一、秋講開講専称寺、御成無之^{〔義龍〕}

八月二日

一、秋講満講ニ付届之事

安永二年癸巳

四月八日

一、学寮上首・知事ノ開講之願

〃 十五日

一、学寮開講ニ付^{〔乗如・応如〕}両門様御成

五月二日

一、学寮上首・知事ヨリ内講伺

六月二日

一、内講々了御届之事

〃 七日

一、上首・知事ヨリ當秋講之伺

〃 十二日

一、来夏講 講本伺之事

一、右ニ付講師・嗣講別段呼出、以書付申渡

七月^{〔マコ〕}

一、学寮満講之伺

但、^{〔乗如〕}本門様計御成被 仰出

八月朔日

一、上首・知事ノ開講伺之事

八月廿九日

一、学寮秋講満講之届

安永三甲午年

五月十一日

一、上首・知事今学寮内講両部開講伺

六月七日

一、當秋講專称寺江被仰付〔義龍〕

一、擬講專称寺呼出、以書付講本申渡

六月十一日

一、来夏講 講本被 仰付

〃 廿九日

一、学寮満講二付〔乗如・応如〕両門様御成

一、秋講八月三日開講伺、但御礼・御成之御沙汰之事

九月十五日

一、上首・知事今法事讀七月廿九日満講之御届

真宗総合研究所紀要 第六号

〃 廿九日

一、佛乘坊〔慧琳〕今伺之趣、学寮御経藏甚不次第故伺之事

安永四年

四月七日

一、学寮支配、佛願寺江被仰付

九日

一、学寮講釋両部開講之伺、両門様御成被仰出〔乗如・応如〕

十二日

一、嗣講福乗寺〔隨慧〕今姫路御坊講尺講本之伺〔秋〕

十五日

一、学寮開講二付〔乗如・応如〕両門様御成

六月十四日

一、藤井隼太学寮奉行被仰付

一、右二付講師始夫々江申達之事

六月十五日

一、知事ハ内講之伺

〃 廿三日

一、学寮〔義應〕當秋講專称〔義應〕寺講本之伺有之

右 御免、寮支配江申渡

廿六日

一、学寮満講二付〔乗如・応如〕両門様御成

七月廿六日

一、秋講開講伺之事

安永五年丙申

四月廿二日

一、学寮開講、両門様〔乗如・応如〕御成無之事

六月廿九日

一、満講伺、但御成被仰出

七月朔日

一、満講二付御成

〃 二日

一、講師〔靈巖〕佛乗坊〔義應〕差出〔義應〕書付之事

擬講專称〔義應〕寺當秋講難勤旨二付伺之事

當秋講無之段被 仰出

安永六丁酉年

四月九日

一、秋講統講專称〔義應〕寺、来ル十五日開講伺

四月晦日

一、當夏講大經講談願上ハ共、開講遅く読残リハ二付、往生礼讃

講談仕度知事・上首ハ伺

〃

一、嗣講〔隨慧〕講談来月七日開講之伺

五月十日

一、寮司恵頼内講開講伺

六月朔日

一、内講靈潭開講之伺

〃 十八日

一、内講靈潭講了之伺

〃 廿三日

一、学寮両部満講二付御届、御成御礼之伺

〃 廿六日

一、満講二付御成

〃 〃

一、秋講相伺_ハ處、當年ハ休講被 仰出

安永七戌戌

四月九日

一、夏中両部之講釋、来ル十五日開講伺

真宗総合研究所紀要 第六号

〃 廿九日

一、寮司敬恵開講伺

五月六日

一、寮司圓隆開講之伺

六月廿一日

一、古学寮ニ被差置_ハ三州浄光寺・筑後浄光寺弟覺山、時移何方江
歟拔出、番人綱所河合九郎左工門蟄居、石松芳兵衛、横江藤藏押
込

一、来夏講本被仰出

一、秋講伺、当年モ休講之事

〔安永〕八年

四月九日

一、両部開講伺

五月朔日

一、内講宣明開講伺
同乗迄

五月八日

- 一、寮司宝景内講開講伺

六月廿二日

- 一、来子年夏講本両部之伺

〃

- 一、名古屋御坊ニテ當秋講尺之義〔秘儀〕、伺之通擬講專称寺江被仰付申渡并講本御免之事

七月二日

- 一、満講御届

〔安永〕 九年庚子

三月朔日

- 一、夏講專称寺講本之伺〔義應〕

四月十日

- 一、夏中両部之講釋開講伺

五月十七日

- 一、寮司宝月内講開講之伺〔香光院〕

六月十四日

- 一、秋講專称寺講本之伺〔義應〕

右同寺呼出申渡事

六月廿二日

- 一、学寮今夏詰ニ付、四月十五日開講相心懸、学寮江出席仕御宗意聴聞仕様、諸国へ御觸渡し願

- 一、右御聞濟、寮支配へ申渡

〔マヌ〕
天明元年

天明九年酉

四月七日

- 一、来ル十五日開講伺

- 一、右ニ付講師佛乘坊へ被仰付処、病氣ニ付御断、仍代講嗣講西〔慧敏〕
福寺江被仰付事

四月廿六日

- 一、佛乘坊病氣ニ付帰国之願之事^{〔慧徳〕}

寛政二戌年

一、マ、

寛政三年

四月八日

- 一、学寮 御免之大品十字御名号御出来ニ付、相渡之事

五月廿二日

- 一、講師香雲庵以 思召身分御内陳ニ御取立、勿論身分之外寺格之儀者都テ有来之通ニ而、身柄衆之格ニハ御免無之之事^{〔慧徳〕}
^{〔定脱力〕}
右ニ付被下物其外被仰渡ハ書付有之事

〃
〃

- 一、右ニ付院家・定衆へ被仰渡之事

六月廿四日

- 一、右ニ付御堂衆并ニ飛檐・定衆・所化中江被仰渡之事

真宗総合研究所紀要 第六号

〃 廿六日

- 一、香雲庵以思召緞子輪袈裟着用御免之事^{〔慧徳〕}

廿七日

- 一、右同人色法服以思召御免之事

寛政五癸丑年

二月廿日

- 一、講師香雲庵死去之届有之之事^{〔慧徳〕}

廿一日

- 一、香雲庵院号御免之事^{〔寂定院〕}

四月十一日

- 一、擬講越中宣明儀被召登、嗣講被仰付^{〔圓乗院〕}

六月十八日

- 一、来寅夏講伺有之

七月三日

一、〔深励〕嗣講永臨寺・開正寺、御宗名一件懸り役被仰付

七月九日

一、〔深励〕嗣講永臨寺・開正寺、自今一人ツ、在京有之様被仰渡

同日

一、〔深励〕永臨寺、自今御合力銀・半季銀五枚ツ、被下事

一、開正寺、御堂衆本座之通御合力銀被下事

〔寛政〕六年

五月四日

一、内講三経往生文類、来ル八日開講之事

六月廿二日

一、〔深励〕嗣講永臨寺講師二被仰付

〃

一、〔皆住院〕擬講鳳嶺嗣講二被仰付

廿三日

一、〔深励〕永臨寺講師二被仰付、今日御礼被仰付事

〃

一、右二付同寺へ被仰渡り御書付有之事

廿六日

一、〔深励〕講師永臨寺、色法服以思召御免之事

七月廿二日

一、〔深励〕講師永臨寺、〔懸掛〕仏乗坊之節之通可被相心得旨被仰出、若帰国可被

〔儀〕致義もいハ、其節之嗣講申入通一樣二被仰付事

同日

一、〔鳳嶺〕嗣講正行寺、御宗名御用懸り被仰付事

寛政七年

五月八日

一、〔蜀〕内講華嚴金師子章、開講伺有之

七月廿二日

一、越後国^{〔忠精〕}牧野備後守殿御領分長岡近在、切支丹同様之邪法有之、御當方御末寺も加り^ハ二付、早々御吟味被為^ハ在^ハ様二、江戸輪番徳善寺^ハ以早便申登し^ハ事

一、右二付三条御坊輪番江、今申^{〔目脱〕}剋頃態飛脚を以 御下知^ハ事

廿五日

一、開正寺、来ル廿七日御再建御書拝読被仰付

八月四日

一、講師永臨寺江^{〔深励〕} 御文被仰付^ハ儀二付、学寮懸席之院家衆^ハ彼是被申上二付、御見計之一件

十一月廿七日

一、講師永臨寺^{〔深励〕}、御再建御書拝読被仰付

〔寛政〕八年

六月十六日

一、當秋講願有之^ハ事

真宗総合研究所紀要 第六号

〔寛政〕九年

六月八日

一、内講天台傳佛心印記、明九日満講御届之事

七月五日

一、来ル開講ニテ御前講永臨寺^{〔深励〕}へ被仰付

八月十二日

一、法事讀十三日講了御届之事

〃

一、満講二付御成可被為^ハ在之旨 被仰出

八月十四日

一、講師永臨寺秋講満講二付、被下物有之^ハ事^{〔深励〕}

享和二壬戌年

六月十九日

一、学寮講師寮内佛壇二御木像安置之儀、永臨寺ヨリ願出之事^{〔深励〕}

文政九年

一月廿九日

一、^{〔注〕}易行院、當夏・来夏講と御差替被仰付

一、右二付當夏講^{〔慧〕}関扇坊へ被仰付

二月十一日

一、^{〔注〕}嗣講易行院江申渡之事

四月五日

一、四月十五日夏講開講伺之事

〃

一、新学寮御出来二付、夫々相達事

十二日

一、十八日開講伺之事

〃 廿八日

一、四月廿九日開講伺之事

五月一日

一、五月六日開講伺之事

〃 十三日

一、十八日開講伺之事

〃 十七日

一、於講堂内講伺之事

〃 廿三日

一、廿四日・廿五日講了伺之事

五月廿四日

一、於学寮所化中七ヶ条演説被仰付、^{〔徳〕}香樹院

六月十四日

一、来夏講仁脉之義^{〔儀〕}二付、^{〔慧〕}関扇坊ヨリ伺之事

〃 十六日

一、来夏・當秋講伺之事

〃 十八日

一、来廿六日満講伺之事

八月朔日

一、来六日開講伺之事

〃 廿三日

一、廿六日講了伺之事

九月五日

一、秋講満講二付御礼被仰付事

十月十七日

一、講者易行院・香樹院・實言院、御目見之上御直命之御趣意之事
(法海) (徳龍) (慧景)

〃 廿四日

一、来夏講香樹院江被仰付置_(徳龍)外、外御用二付、代圓満寺_(靈性)へ被仰付

事

霜月廿四日

真宗総合研究所紀要 第六号

一、易行院_(法海)、廿六日批判初而被仰事

〔文政〕十年

四月十三日

一、来四月十六日開講伺之事

〃 廿四日

一、當夏於講堂内講伺之事

五月四日

一、講了伺之事

〃 十五日

一、筑後覺了寺擬講吹拏之事
(円龍)

〃 十六日

一、五月十九日講了伺

六月九日

一、来子年夏講伺之事

〃 廿日

一、来廿三日講了伺之事

〃 廿六日

一、筑後覺了寺擬講被仰付
(阿龍)

閏六月二日

一、来子年夏講正像末香樹院江被仰付有之^(德龍)外、思召有之如説院江被仰付
(慧題)

八月廿九日

一、来九月朔日講了伺之事

九月朔日

一、来ル五日講了伺之事

〃 五日

一、擬講淨玄寺、秋講々了二付御礼
(智現)

十一月廿一日

一、嗣講如説院、當年限初夜批判被仰付
(慧題)

十二月十四日

一、講者淨満寺実言院義、御門末為御教示江戸御坊ニおゐて死去二付、贈嗣講被仰付、其外被下物等有之事
(慧思)
(儀)

文政十一年戊子

二月四日

一、嗣講如説院・正行寺・圓滿寺江、於黒書院御直命之事
(慧題)
(天色)
(靈地)

四月六日

一、来四月十五日開講伺之事

一、学寮御門、講後片扉明^(儀)様願之事

〃 十四日

一、講師五乘院義上京後病氣二付、開講四五日延引之願
(宝景)
(儀)

十八日

一、四月廿日開講之伺

廿一日

一、於講堂内講伺之事

廿二日

一、四月廿四日開講伺之事
一、^{〔ママ〕}同月廿五日開講伺之事

五月廿九日

一、嗣講座順願之事

六月六日

一、来丑年夏講伺之事

十六日

一、来廿日講了・廿三日講了・廿六日満講伺之事

十九日

一、学寮人数書ヲ差上り事

七月廿五日

真宗総合研究所紀要 第六号

一、八月三日開講伺之事

九月朔日

一、九月六日講了伺之事

五日

一、擬講^{〔四體〕}覺了寺秋講満講二付、御礼之事

〃

一、右二付如例銀子被下り事

十八日

一、講師^{〔宝景〕}五乘院死去之届

十月四日

一、光德寺易行院講師被仰付り事^{〔法海〕}

十月十五日

一、来丑年夏講、五乘院^{〔宝景〕}往生二付易行院^{〔法海〕}江被仰付り事

十二月廿五日

- 一、先講師五乘院死去ニ付、先達（宝恩）テ所化中（儀）の歎之義ニ付、今日御沙汰之事

文政十二年己丑年

正月廿三日

- 一、学寮上首ヨリ作事方迄差出（儀）書付之事

四月六日

- 一、四月十五日開講伺之事

〃 廿一日

- 一、四月廿日・廿三日開講伺之事

五月廿九日

- 一、六月朔日講了伺之事

- 一、六月三日講了、同四日開講伺之事

六月十日

- 一、来年夏講并當秋講伺之事

十五日

- 一、来十八日講了伺之事

十七日

- 一、学寮（儀）の当夏詰衆人数書差上事

十九日

- 一、来ル廿日講了伺之事

〃

- 一、當丑年夏講満講伺之事

八月五日

- 一、講師易行院（注海）帰国之願

九月三日

- 一、来七日講了伺之事

〔白紙一頁〕

文化元年

六月十二日

- 一、當秋(宝暦)五乘院講本伺

〃

- 一、来丑年夏講本伺

十八日

- 一、開正寺来ル七月羽州江罷下ハニ付講本伺(宣明)

廿日

- 一、学寮両部講了伺、但御成御礼伺

八月二日

- 一、五乘院開講伺(宝暦)

七日

- 一、内講寮司大含開講之伺(宝暦)

〔文化〕二年

真宗総合研究所紀要 第六号

四月七日

- 一、学寮両部講釋開講伺

- 一、右ニ付着帳、町支配へ申渡

- 一、右ニ付御成被仰出、院家・定衆へ申達

〃 十一日

- 一、内講靈曜開講伺(威広院)

五月十四日

- 一、内講法海開講伺(易行院)

- 同 賢蔵右同断(教主院)

廿一日

- 一、(淨証寺) 智明・靈曜・賢蔵・法海擬講ニ被仰付(教主院)

右之内身柄有之、定衆・小奏者へ申達ハ事

廿四日

- 一、擬講被 仰付之四人御礼之事

六月三日

史料紹介『本山上檀古記録抜萃』

- 一、講師永臨寺〔深助〕の毎年秋講内講等之伺

十二日

- 一、秋講講本伺二付、以切紙講師へ達ハ事

〃

- 一、来寅夏講々本両部之伺、仍之切紙之事

廿日

- 一、両部講了之伺

閏八月七日

- 一、擬講常德寺講了之伺〔内盛〕

九日

- 一、秋講相勤ハ二付、永臨寺同道〔深助〕ニテ常德寺詰所江罷出〔内盛〕事
右二付講者へ銀子五枚被下

〔文化〕三年

四月五日

一一〇

- 一、當夏擬講法海、所化之願ニよつて於講堂唯識論述記内講仕〔機〕義、

永臨寺〔深助〕の申上置ハ事

右仰書之事

〃

- 一、学寮講釋両部開講之伺

七月廿三日

- 一、擬講五乘院宝景〔宝景〕嗣講被仰付〔深助〕

- 一、右二付寛付之事〔深助〕講師へ相渡、五乘院講師同道御請二罷出〔宝景〕

右二付申達ハ断り之事

- 一、嗣講被仰付ハ御礼御席之旨申達ハ事

〔文化〕四年

七月廿八日

- 一、秋講浄証寺知明講本之伺

七月十七日

- 一、両部講了伺

一、来夏講本伺

〔文化〕 五年

四月七日

一、講師寮通路御差留之處、^{〔宝景〕}五乘院・^{〔靈囑〕}養念寺々御歎之趣及言上ハ處、
御沙汰之趣有之、則五乘院へ申渡

五月廿九日

一、開講伺

一、永臨寺々内々申上ハ者、^{〔深励〕}昨年迄嗣講兩人ニ而隔年ニ講釈相勤ハ
處、^{〔脱字アルカ〕}様仕度旨伺、御聞濟無之事

六月十二日

一、秋講養念寺講本伺之事^{〔靈囑〕}

一、来巳夏講本伺

十八日

一、講了伺

〔文化〕 六年

六月十三日

一、秋講淨願寺講本伺^{〔賢感〕}

〃

一、来午夏講本伺

十五日

一、講了伺

〃

一、御成被仰出

〔文化〕 七年

十月十日

一、擬講養念寺御不審之儀有之、宿預被仰付^{〔靈囑〕}

〔白紙一頁〕

○文化七年年

尾州養念寺

其許儀去ル三月不念之筋ニ付、役柄不相應ニ被 思召遠慮被
仰付置候處、今般深重之以 御寛宥御咎被成 御免候、尚右
ニ付被 仰聞候儀有之ハ得者、直様可致上京候、右之段申達
候事

午
六月

但、右書付輪番泉龍寺江御渡有之ハ事

一、尾州名護屋表異様ノ勸方イタシ候僧侶有之、御聞糺之上被 仰
渡候演説如左

- 一、其国遍慶寺了雅・正本寺秀山・願生寺任誓・正賢寺現海・安
養寺後住靈瑞、右五人ノ者近来異様ノ勸方イタシ候趣達 御
聞、御聞調之上被 召登御糺有之候處、右ノ者共勸方如左
- 一、信シテモ助カラス、頼テモ助カラス等ト嚴敷機ヲ拂フ事
- 一、他力ノ信心ヲ獲サレハ、念佛申ニ地獄ヘ墮ト申候事
- 一、総シテ餘人ノ教化ヲ法体募リト貶シメ候事
- 一、此機ノナリノ御助ニタンノウスル計リト相勸メハ事
- 右等ノ件々都テ自己ノ料簡ヲ以テ相ス、メ、御相承ノ御教化
ヲ乱シハ段御聞糺有之候處、右ノ者共心底ヨリ誤入回心状差
上ハニ付、以深重ノ 御慈悲御教誡被成下、尚又御裁許被

仰渡事令落着ハ得共、右ノ者勸方自然ト致流布、其国ノ御門
葉若心得違之輩モ可有之哉ト御不安意被為 思召、今般嗣講
皆往院御差下、於其御坊演説被 仰付候間難有拜聴可仕ハ、
畢竟右等ノ儀モ全ク御宗意ニ疎々敷ヨリ相起リハ事ニ候得
者、今度御糺ノ面々ハ勿論、其餘ノ坊主分モ兼テ被 仰出ハ
通、無油断學問研究之上篤ト御宗旨相辨ヘハ間、可令教導者
也、右被 仰出ハ也

文化七年九月

午
十月

- 一、尾張国へ御使僧願照寺御指下ニ付、持參之演説書左之通
- 於其國御末寺之内、異様成勸方イタシ候族有之間、先達テ被
召登御糺之上御教誡之處、道俗右体惑ヒノ程モ可有之哉ト、
御不安慮ニ被 思召ハニ付、為御教誡嗣講皆往院御差向、四
ヶ條ノ趣ニ付既演説被 仰付ハ得共、多分ノ御門葉相洩ハ者
モ可有之哉、猶又御使僧願照寺此度御差下シ向ニ令経廻行届、
聴聞ハ様トノ 尊慮候間、難有可被存ハ、夫ニ付諸宗各立ノ
上一宗ノ教導不私儀ハ不及申、何レノ宗旨ニテモ新義妄説ヲ
以テ諸人ヲ欺キ惑シハ儀ハ、前々ヨリ御国・寺法ノ御嚴制ニ
候ヘハ、以来ハ御掟之趣太切ニ相守可申ハ、尤御坊主分ハ自

他ニ互リ學問研究ハ勿論ナカラ、多クハ藝學ニナリ、或ハ名利又ハ我慢勝他ノ意ヨリ令勸化(一)ハ間、説聴共ニ出離ノ本意ヲ失ヒ、御化導ニ付種々ノ障導(二)令出來ハ様ニ相成(三)ハ事、実ニ歎ケ數次第二ハ、此上共心得、惑ノ族ハ速ニ相改、正意ニ本ツキ佛法・世法共鹿略ノ心得無之様、僧俗一同一味ノ安心ニ住シ潤敷御法義相続ハ、御安意可被遊ハ、猶御使僧可為演説ハ事

右之通被仰出候也

十月

○文化八年

一、尾州寺社役所へ、御使僧(慧應)法幢坊持參ノ口上書如左

口上竟

御国内当方末遍慶寺等異様ノ勸方致ハニ付聞調之上、去春夫々糺品被申付候、然處其後彼是入組出來、今以御国・法御苦勞ニ相成(達如)ハ段、御門主厚氣之毒ニ被存候、右ハ全講者共糺方等不行届、懸リ役者共不念ノ筋有之ハニ付、夫々取調中締方被申付置ハ、此上ハ御国法御糺品ヲモ被致承知、右ニ准シ寺法取捌方モ被申付ハ含ニ御座候、就夫此度ノ一件ハ全其本ト法義筋ヨリ及違乱ハ儀ニハ得ハ、法義ノ正否判然ト相分リ

真宗綜合研究所紀要 第六号

不申ハテハ往々亦復御苦勞相掛リ可申哉、尤法義筋及違乱ハ儀ハ御国制ノ御差支ニモ可相成勿論、被為對 公儀ハテモ等閑ニハ難被指置訳柄ニテ、既ニ近來他山ヘノ被 仰渡ハニモ、諸國ノ門徒トモ宗意ニ途ニ相分レ、次第ニ及惑乱候得トモ一途ノ裁断モ無之、新義ヲ唱ハ僧侶共ヲ速ニ擯外ニモ不及候段、不束ノ趣被仰出ハ由モ被承及ハ得者、當時御国内門末共、一方ハ不正義致屈執、一方ハ古來ノ宗教相守、右体ニ途ニ相分リ候處、一途ノ裁断無之ハテハ追々餘國ヘモ指響キ、不容易成行ニモ至リ可申哉ト、此段甚以被致苦慮ハ事ニ御座ハ、尤去春ノ糺品、遍慶寺等勸方ハ祖師相承ノ教化筋ニ曾テ無之異様ノ勸方ト被加制誡、一旦一途ノ裁断ニモ被及ハノ處、聊成法談ノ辨ノ誤ト申紛シ、再及違乱ハ訳ニ御座ハ得ハ、猶更手厚不被加教誡ハテハ、御門跡教導ノ御本意モ難相立御事ニ御座候、然處長引ハテハ御苦勞筋相重リハ儀ハ勿論、於本山モ先講師香月院取調中締リ方被申付置候ニ付、越前・大坂辺門末共ノ内、彼是本山表へ難題ケ間敷申出候次第モ有之候得者、是以夫々糺品被申付度ハ、右ノ趣ニ付御繁務中被憚入候得共、何トモ御取計方御早行ノ儀、以使僧厚御頼被仰入ハ、前段之趣御含ノ上宜御沙汰可被成下ハ、猶使僧口上ニ可申演候、以

九月 本願寺御門跡使僧

法幢坊(慈應)

一、大坂表御使僧(東坊)南窓坊御指下、演說書如左

本半

此度御使僧御指向ノ儀ハ、先達香月院儀(深勵)ニ付、四ヶ條ノ御書付輪番順正坊ヲ以テ被仰聞(儀)ハ、一同承知可有之處、其儀未行届(儀)ハ、彼是申出ハ輩モ有之趣相聞、甚御苦勞ニ思召ハ、依之態ト御使僧御指向有之、篤ト其趣意行届ハ様トノ思召ハ候間、其段厚可被致敬承候、就夫此度ノ一條尾州国制ニ差響キ不容易事ニテ、発端ヨリ深く被遊御苦慮ハ御事ニテ、具成訳合不存輩ハ仮初ノ御取扱ノ様ニモ可存哉、元ヨリ御慈愛ノ御含ハ不及申、且一國ノ惑ヒ諸国ニオヒ候道理ハ勿論、別テ近來從 公儀被仰出ハ趣モ有之、就御寺・国法不御私御儀、何分ニモ御素意之通御取計可被為在之事ト被相窺ハ、夫ニ付其表諸講中之義(儀)ハ、御本山御坊所之儀ニ付テモ、從來厚志ノ御取持ト申御タメヲ被存ハ由ニテ、追々申上ノ儀ハ不外思召、各申上ニ不拘一体之處御年限ノ事ニハ、御取計方モ可被為在之ハ得共、前條被仰聞ハ趣ヲ以恐察可被在之候、何レ彼地取調ノ向相分リ次第 御裁許可被仰出、聊於御本山無御如

在ハ候間、此等之趣被致敬承被奉休 尊慮ハハ、可為御安堵ハ、其表ノ義(儀)ハ不外思召ハ候間、分テ此等ノ始末被仰聞置度、末々マテモ行届心得惑ヒ無之様ト思召ハ事

未
九月

●文化九年壬申

●文化十年癸酉

一、文化十年申(酉)西ノ七月廿一日、香月院講師休役願ニ付左ノ通被仰出、書付ヲ以於上檀ノ間被仰渡(深勵)

一、今度講者退役被相願 被聞召候、就夫其許追々及老年、別テ近年病身ニモ相成ハ由、長々講師被相勤大儀ニモ思召候得者、願意之通休役可被仰付歟ニハ共、学寮結夏聴衆モ多ク次第ニ御繁栄ニ、付テハ寮内取締等モ示談被仰付度、尤モ一昨年開正寺儀モ講師被仰付置ハ、旁一役ト申ニテモ無之ハ得ハ、願書ハ被成御預リ置ハ條、今暫被相勤ハ様御沙汰ニテハ、右寮内取締ニ付テハ、近年結夏聴衆モ相増、寮司・擬講等吹拳モ餘多可有之候得ハ、九夏満・十六年満ニテ次第先進ノ規則混雜無之様、弥以心添可有之、既ニ寮司ニモ相進ハ輩ハ往々講者ニモ令転

進（儀）候得ハ、学解学風ハ勿論、衆ノ帰状并人体行状等マテモ篤（ト）示談ノ上遂吟味、吹拏有之儀專要二候條、其向々エモ可被申聞置（ハ）、是亦師弟ノ本意ヲ誤リ社中或ハ從随ト称シ講者ヘ片寄、互ニ以我情令褒貶候儀等無之、万事ニ付如法ニ修学（ハ）様常ニ示シ可被置（ハ）、殊ニ俗体ノ身分ニテ右様ノ儀ハ尚更以有之間敷儀ニハトモ、総テ真俗共輕々敷法義ヲ取扱（ハ）テハ、御繁榮ノ御宗体ニ候得ハ、超過ノ失、違乱ノ基ト相成（ハ）テハ、実ニ御大切ノ儀ニ思召（ハ）得ハ、猶更無油断被相心得寮内取締被下、万端被申談（ハ）様被 仰出（ハ）ニ付、此段申達候事

七月

○一、右因ニ如左御口達

- 一、寮司、擬講被申渡（ハ）節ハ、以来誰々ノ弟子、何国何寺何ト申僧被申渡相済（ハ）段、講師ヨリ御届置可被申候旨申達ス
- 一、講師兩人ト申義（儀）先例モ無之、此度限リノ思召ニ候得ハ、例ニ不相成義ト可被相心得置（ハ）段申達ス

○尾州渡辺半藏ヨリ講師（深勵）香月院法話・講釈被致度旨、守綱寺代教円寺ヲ以テ来状左ノ通

真宗総合研究所紀要 第六号

一筆令啓上候、弥無御障（珍）弥重存（ハ）、然ハ御宗意心得度、講師越前香月院法話・講釈、拙者并魯淳就懇望、於守綱寺聴聞致度、此節御差支モ無御座（ハ）ハ、此者工御指越被成下（ハ）様致度奉願（ハ）、此段宜御取計被下（ハ）様頼致候、恐惶謹言

九月十四日

渡辺半藏 判

下間式部卿法眼様

下間治部卿法眼様

粟津 出羽介様

石井 隼 人様

猶々本文之趣守綱寺ヲ以可相願之處、幼年ニ付教円寺ヲ以テ奉願候、何分宜頼致候、以上

△右ニ付返書左ノ通

貴札致拜見（ハ）、秋冷之節弥御賢勝被成御勤、珍重御儀奉存（健）、然ハ宗意御心得被成度、講師越前香月院法話・講釈、貴家御両方就御懇望、於守綱寺御聴聞被成度（深勵）間、此節差支モ無御座（赴）ハ以、其御表工差趣（ハ）様御頼御紙表之趣具ニ致承知、則申達候、然處講師之儀ハ諸国門末為安心研究在京被申付置（ハ）儀ニハ得ハ、日々法用取調ニ付暫時モ他出ノ儀ハ難被申付、且又講釈ノ儀ハ門末為聴講於本山学寮被立置候ニ付、上京之

上令入寮修学可致規定ニ付ハハ、講師ニ不限学寮ノ外講談相催ハ儀ハ難相成仕来ニ御座候、就御懇望宗意安心宗意安心御聴聞被成度趣ハ、不浅御奇特ノ義ニ思召付得共、右等ノ次第ニ付香月院被差下付儀者御断ニ被及度付、随テ先年為教諭輪番共被差向付準例モ有之付得ハ、此度對貴家御父子工、於守綱寺宗意之趣可及法話旨、輪番西然寺工可被申渡付條、此段否今一応為御申登御座付様致度付、右御報旁得御意度、如斯御座付、恐惶謹言

九月廿一日

御連名 書判

渡辺半蔵様

猶々本文之趣守綱寺幼年ニ付教円寺御差出之旨、御端書之趣入御念付御事ニ御座付、則自是モ同寺工相達申付、以上

○尾州渡辺半蔵ヨリ来状

一筆令啓上付、冷氣之節ニ御座付得共、御門主様倍御勇健被成御座奉恐悦付、然者先達テ宗意心得度、講師越前香月院法話・講釈於守綱寺致聴聞度、教円寺ヲ以テ奉願付處、於御本山上寮御取立被置付ニ付、上京之上令入寮可致修学御規定ニ候得ハ、不限講師学寮ノ外講釈相催ハ儀ハ難相成御仕来ニ御座付間、被及御断度御沙汰之趣承知仕候、香月院高名ノ儀

承及ハ儀故、父共宗意承度、不限学寮、外ニテモ法話有之趣致承知罷在付ニ付、奉願ハ儀ニ御座付、且輪番共御指向御座付準例モ有之付得ハ、於守綱寺宗意之趣可及法話旨、輪番西然寺へ御申渡付之條、此段否可申上旨意仕合奉存候、輪番其外ノ儀ハ懇望無之付間御断申上付、此段御序之剋可然様御沙汰頼存付、恐惶謹言

十月七日

渡辺半蔵 書判

○右工御返書左之通

貴札致拝見候、冷氣之節弥御堅勝被成御勤、珍重ハ儀奉存候、然ハ先達而宗意御心得被成度、講師越前香月院法話・講釈、於守綱寺御聴聞被成度、教円寺ヲ以テ御頼御座候處、於本山上寮被立置候ニ付、上京之上令入寮可致修学規定ニ付得者、講師ニ不限学寮ノ外講釈相催ハ儀ハ難相成仕来ニ御座付間、被及御断付段御承知被成付處、香月院高名之儀及御聞、御懇望被成付由、不限学寮外ニテモ法話有之趣御承知御座付付、御願御座付由、且輪番共被指向付準例モ有之付得ハ、於守綱寺宗意之趣可及法話之旨、西然寺へ可被申渡哉ニ付、否御申登御座付様得御意付處、輪番其外之儀者御懇望ニ無御座付間御断、御帟面之通委曲致承知付、則申達付處、全宗意御心得

被成度トノ御事、於^{〔達如〕}御門主モ御奇特之儀ニ思召^{〔儀〕}、右ニ付テハ孰レ無餘義趣意モ有之^{〔儀〕}ニ付、御文通ニテ得御意^{〔儀〕}ハ無與何角立候様ニテ如何敷、依テハ今般西然寺被召登、篤ト思召之趣意モ被仰含^{〔儀〕}テ、同寺^{〔儀〕}御示談可申、左様御承知御座^{〔儀〕}様致度、右御報旁如斯御座^{〔儀〕}、恐惶謹言

十月廿八日

渡辺半藏様

○加州金沢御坊ニ於テ講釈之儀、今般願有之御聞濟有之^{〔儀〕}處、加・能・越三ヶ国へ御奉書御觸御指出之儀是又願有之、右願之通御免ニテ、左之通り

一筆令啓上^{〔達如〕}、先以御門跡様御機嫌能被為成御座^{〔儀〕}、然ハ於加州金沢御坊講釈之儀、依深重之願御聞濟有之、則講師開正^{〔宣明〕}寺へ被仰付、来^{〔戌〕}戊年二月五日開講之事ニ^{〔儀〕}間可被得其意^{〔儀〕}、為其如斯^{〔儀〕}

閏十一月十日

石井隼人

下間式部卿法眼

●文化十一年甲戌

真宗総合研究所紀要 第六号

●文化十二年乙亥

○尾州渡辺半藏ヨリ来翰写（二月七日着）

一筆令啓上^{〔深勵〕}、餘寒之節無御障玆重存^{〔儀〕}、先達テ御宗意心得度、講師越前香月院法話・講釈、拙者并魯淳懇望ニ付、致聴聞度相願^{〔深勵〕}、香月院儀ハ無御據御子細之趣ニ付御差向難被成段、輪番西然寺ヨリ致承知^{〔儀〕}、外講師之儀差支無之ニ付、御差向モ可被成旨致承知、被入御念^{〔儀〕}儀忝仕合奉存候、香月院儀ハ高名ニ付、致聴聞度奉願義ニ御座^{〔儀〕}、外講師之儀ハ先見合可申^{〔儀〕}、此段宜御取計被下度頼致^{〔儀〕}、恐惶謹言

正月廿八日

渡辺半藏 無判

○右ニ付御返翰左之通

貴札致拜見^{〔儀〕}、春寒之節弥御清勝被成御勤、玆重御儀奉存^{〔儀〕}、然ハ先達而宗意御心得被成度、講師香月院法話・講釈御懇望ニ付、御聴聞被成度御頼ニ御座^{〔儀〕}、香月院儀ハ無據子細有之^{〔儀〕}ニ付御差向難被成段、輪番西然寺ヨリ御承知被成^{〔儀〕}、外講師之儀ハ差支無之ニ付御差向可被下旨ニ^{〔儀〕}へ共、香月院之外、講師之儀ハ先御見合可被成^{〔儀〕}段、被入御念^{〔儀〕}御紙上之趣委曲致承知^{〔儀〕}、右貴報意如斯ニ御座^{〔儀〕}、恐惶謹言

二月七日

渡辺半蔵様

○文化十三年子

十月尾州渡辺半蔵ヨリ来状如左

一筆致啓上^ハ、寒冷之節弥無御障玆重存^ハ、然者今般講師易^{〔法海〕}
行院師願御指向被成下、菩提所於守綱寺、右僧法話追々致聴
聞忝仕合奉存^ハ、付テハ今日マテ五日ノ間相済申^ハ處、隱居
魯淳初甚残念之至ニ付、今・兩日モ法話聴聞致度当地掛所表
へ申達候、御日限延引之段何分可然様御取成頼存^ハ、恐惶謹
言

十月十九日

渡辺半蔵規綱 判

右ニ對シ承知ノ返報アリテ、又謝状アリ

○文化十四年丁丑

諸式十三

○宝曆九年

江州国友村願海寺門徒 勘 助

一、其方儀、俗体ノ身トシテ他領他村江令徘徊同行会合、且又
私宅へ諸方同行相集、無尽講ト称シ異様ノ法義相勸、御門徒

ヲ惑乱セシメ^ハ條顕然タル事

一、去五月、長濱御坊ヨリ右体ノ儀御糺ノ儀ニ付、総門徒各令
印形御請申上候處、其方共彼是及異儀御請不仕^ハ事

一、其方廿年以來別宅ヲ構へ令住居^ハテ、至今迄内仏本尊安置
不仕^ハ事

右三ヶ條御不審有之^ハ處、其方申訳不分明ニ候、其上以 御
慈悲法義之筋段々御吟味被仰付^ハ處、只當場ヲ言ヌケ心底ヲ
有ノ俣ニ不申上、回心懺悔ノ所存無之事不届之至、言語道斷
ニ思召^ハ、依之此度御宗門ノ御手ヲ被放^ハ事、右之通被仰出
事也

卯
十二月